

## 昭和61年 茨城県鉱工業指数の概況

### 全国の動向

#### 1. 生産

昭和61年の鉱工業生産は、前年比△0.3%の低下、出荷は同0.1%とほぼ横ばいとなった。

鉱工業生産は、60年後半に出荷が横ばうなか在庫調整が行われるなど調整局面を迎えたが、61年には、これに急激な円高によるデフレ効果の影響が加わり、第1次オイルショック後の50年以來11年ぶりの前年割れとなった。

鉱工業生産が前年割れとなったのは、

- ① 輸出が4～6月期以降3期連続して前年割れとなるなど、円高の影響が輸出数量面に顕在化したこと、
- ② 製造業の収益悪化等に伴う設備投資の低迷により、国内向けの資本財出荷の増勢が大幅に鈍化したこと、
- ③ 需要の不振を背景に、素材型業種を中心に在

庫調整が進展したこと、  
などによるものである。

円高は、原材料コストの低下による企業収益の改善、物価の低下による実質購買力の上昇を通じての生産拡大効果を伴うと考えられるが、61年の生産活動には、そのようなメリットをはるかに上回って輸出の低下等による生産抑制効果が顕在化したものと考えられる。

鉱工業生産の先行きについては、輸出が今後も低下が予想され、国内最終需要は個人消費、建設投資が上昇基調で推移する反面設備投資が力強さに欠けるものと考えられることに加え、在庫についても調整局面が続くものと見込まれることから、当面停滞傾向で推移するものと思われる。

61年の鉱工業生産の四半期別の推移をみると、1～3月期前期比0.2%、4～6月期同0.2%の微増と上期はほぼ横ばいで推移したが、下期は7～9月期同△0.5%、10～12月期同△0.7%と

表—1 鉱工業指数の推移（全国）

（55年=100, 季調済）

	59年	60年	61年	59年				60年				61年			
				1～3月期	4～6月期	7～9月期	10～12月期	1～3月期	4～6月期	7～9月期	10～12月期	1～3月期	4～6月期	7～9月期	10～12月期
生産	116.5	121.9	121.5	112.4	115.5	117.4	120.6	120.2	122.9	122.7	121.6	121.8	122.1	121.5	120.7
前期(年)比	11.1	4.6	△0.3	3.1	2.8	1.6	2.7	△0.3	2.2	△0.2	△0.9	0.2	0.2	△0.5	△0.7
前年同期比	—	—	—	11.1	12.0	10.6	10.7	6.3	6.6	4.7	1.1	1.3	△0.6	△1.1	△0.7
出荷	112.4	116.5	116.6	109.5	111.4	112.7	115.8	114.9	117.1	116.9	116.9	116.2	116.6	116.4	117.3
前期(年)比	8.7	3.6	0.1	2.7	1.7	1.2	2.8	△0.8	1.9	△0.2	0.0	△0.6	0.3	△0.2	0.8
前年同期比	—	—	—	9.7	9.4	7.5	8.4	4.1	5.1	3.9	1.4	1.2	△0.3	△0.3	0.3
在庫	101.5	106.2	104.0	96.0	99.4	100.5	103.2	106.3	108.7	108.8	108.5	110.1	107.6	106.9	106.2
前期(年)末比	9.4	4.6	△2.1	1.9	3.5	1.1	2.7	3.0	2.3	0.1	△0.3	1.5	△2.3	△0.7	△0.7

（注）年の数値は原指数による。

それぞれ低下し、年央以降停滞色を強めている。

(表-1)

業種別にみると、58年以降生産の拡大を主導してきた加工型業種は、円高の影響はそれぞれの業種により異なるものの輸出の不振等により低調に推移し、加工型業種総合は前年比1.0%の上昇と極めて低い伸びにとどまった(58年同7.1%、59年同20.0%、60年同8.9%)。

加工型業種の中で、生産の拡大の牽引役であった電気機械工業は、60年後半より増勢の鈍化がみられたが、さらに、61年は前年比6.0%と過去3年の伸び(58年同19.6%、59年同29.2%、60年同11.2%)を大幅に下回った。電気機械工業の生産は上期には順調に推移し鉱工業生産を下支えしていたが、7～9月期は前期比△0.4%、10～12月期には輸出が大幅に低下したことにより同△0.9%と2期連続の低下となっており、円高の影響が次第に顕在化しつつあるものと考えられる。同様に精密機械工業も円高により輸出が低迷しておりウォッチの在庫が積み上がるなど前年比4.8%(59年同16.4%、60年同17.0%)と大幅に伸びが鈍化した。四半期別の推移をみると、7～9月期は前期比△7.2%、10～12月期は同△4.7%とやはり年後半に大幅な低下がみられる。また、一般機械工業と輸送機械工業は円高の影響が大きく、それぞれ前年比△6.9%、同△2.9%と3年ぶりの前年割れとなった。一般機械工業は円高による輸出の低下や製造業の収益の悪化等に伴う設備投資の減退から金属加工機械等の需要が不振であり、60年10～12月期以降5期連続の低下となっており低迷が続いている。輸送機械工業も円高等の影響から、鋼船、トラック、二輪自動車等の生産が減少したことから、61年4～6月期以降3期連続の低下と

図-1 鉱工業指数の推移

図-1-(1) 生産

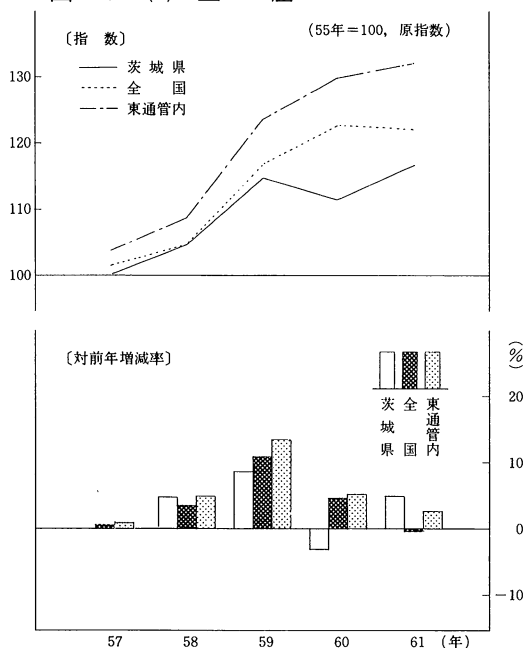
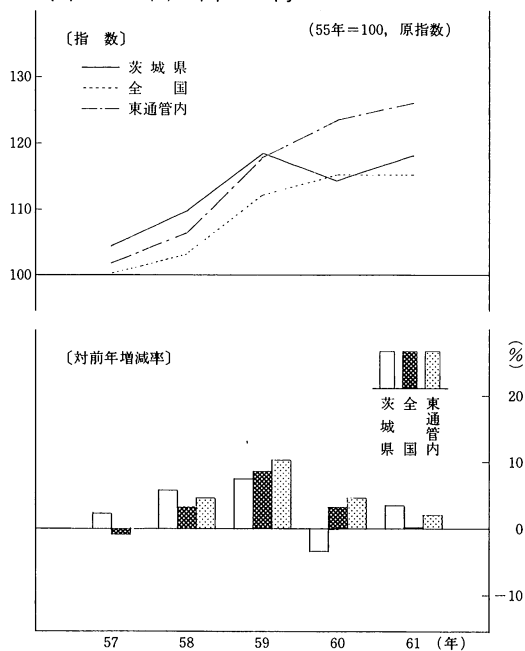
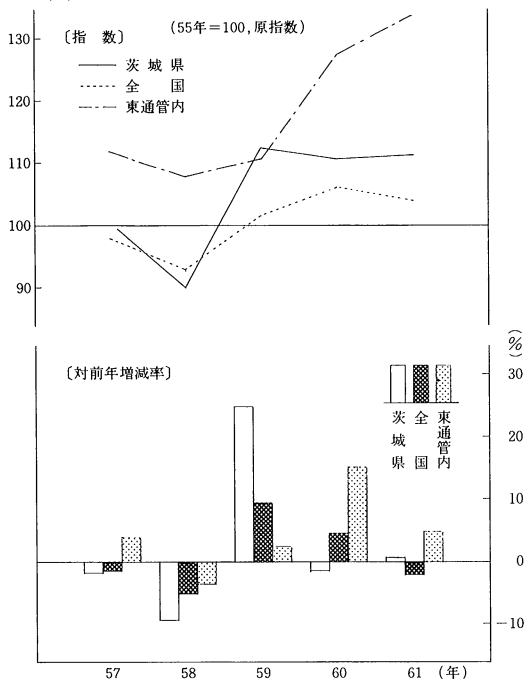


図-1-(2) 出荷



## ■ 調査から

図一(3) 在 庫



となった。

一方、素材型業種は円高による需要の減退の影響から在庫調整を進めていることなどから、素材型業種総合は前年比△2.5%と4年ぶりの前年割れとなった。しかし素材型業種のなかでは業種間では行性がみられる。パルプ・紙・紙加工品工業が情報関連用紙等を中心に内需が堅調なことから同2.9%と57年以来5年連続の上昇となったほか、化学工業(除く医薬品)も円高にもかかわらず東南アジア向けの繊維原料等の輸出が好調だったことに支えられ、同0.2%と前年の水準を維持しており、この両業種は堅調に推移している。一方、鉄鋼業は円高による輸出の低下や国内向け出荷の中の間接輸出分の減少等から在庫調整を進めており、同△6.0%と大幅な低下となった。非鉄金属工業も円高により輸出品への代替が進行していること

に加え市況が低迷し、アルミニウム等が減少したことから、同△0.9%の低下となった。

その他の業種では、石油・石炭製品工業は製造業の生産活動の停滞や原油安による市況の低迷から生産調整を行ったことにより、前年比△4.0%と2年連続の低下となった。繊維工業も円高による輸出の低下、NICS等からの製品輸入の増大により同△4.1%と低下した。

以上のように、61年の鉱工業生産は、円高デフレの影響によりほとんどの業種で60年に比べて生産の低下もしくは伸びの鈍化がみられ、特に年後半加工型業種の生産が低下したことから停滞色を強めることになった。

## 2. 出 荷

昭和61年の鉱工業出荷は、前年比0.1%とほぼ横ばいとなった。財別にみると、非耐久消費財、建設財等が上昇し、生産財、耐久消費財が低下した。

## 3. 在 庫

昭和61年の鉱工業生産者製品在庫は、前年末比△2.1%と3年ぶりに低下した。

## 本県の動向

61年の本県における鉱工業指数をみると、生産は116.1で前年比4.8%の上昇、出荷は119.0で同3.6%の上昇、在庫は111.2で同0.5%の上昇であった。

鉱工業生産は、円高の影響による電気機械工業関連の輸出及び設備投資の伸び悩み等により10年ぶりに低下した前年と比べ、ウエイトの大きい一般機械工業が乗用車用エアコン、土木建設機械の

表-2 鋳工業指数の推移

(55年=100, 原指数)

		57 年	58 年	59 年	60 年	61 年
茨 城 県	生 産 対前年増減率(%)	100.3 0.0	105.1 4.8	114.4 8.8	110.8 △3.2	116.1 4.8
	出 荷 対前年増減率(%)	104.2 2.2	110.2 5.8	119.0 8.0	114.9 △3.5	119.0 3.6
	在 庫 対前年増減率(%)	99.5 △1.7	90.1 △9.5	112.4 24.8	110.6 △1.6	111.2 0.5
全 国	生 産 対前年増減率(%)	101.3 0.3	104.9 3.6	116.5 11.1	121.9 4.6	121.5 △0.3
	出 荷 対前年増減率(%)	99.8 △0.8	103.4 3.5	112.4 8.7	116.5 3.6	116.6 0.1
	在 庫 対前年増減率(%)	97.9 △1.5	92.8 △5.2	101.5 9.4	106.2 4.6	104.0 △2.1
東 通 管 内	生 産 対前年増減率(%)	103.5 0.8	108.5 4.8	122.9 13.3	129.2 5.1	131.6 1.9
	出 荷 対前年増減率(%)	102.1 0.0	107.1 4.9	118.9 11.0	124.5 4.7	127.4 2.3
	在 庫 対前年増減率(%)	111.9 4.0	107.9 △3.6	110.6 2.5	127.3 15.1	133.5 4.9

(注) 東通管内：関東地方1都6県に新潟県，長野県，山梨県，静岡県を含めた1都10県。

大幅な伸びにより上昇したこと，前年大幅に低下した電気機械工業がややも直し上昇したこと，また，輸送機械工業が上昇したこと等により，鋳工業全体で上昇に転じた。(表-2，図-1)

年間の動きを四半期別にみると，生産は1～3月期は前期比で8.8%の上昇，4～6月期は同△2.0%の低下，7～9月期は同1.2%の上昇，10～12月期は同1.6%の上昇となり上昇傾向にあるが，ピーク時の59年10～12月期と比較すると，若干下回っている。出荷は，1～3月期は前期比で9.5%の上昇，4～6月期は同△3.8%の低下，7～9月期は同2.2%の上昇，10～12月期は同1.0%の上昇

となった。在庫は，1～3月期は前期比で4.8%の上昇，4～6月期は同△2.4%の低下，7～9月期は同△3.2%の低下，10～12月期は同3.3%の上昇となった。(表-3，図-2)

前年同期比でみると，生産は1～3月期は4.3%の上昇，4～6月期は1.7%の上昇，7～9月期は4.2%の上昇，10～12月期は8.9%の上昇となり，各期とも上昇した。出荷は，1～3月期は3.9%の上昇，4～6月期は△0.5%の低下，7～9月期は3.4%の上昇，10～12月期は7.5%の上昇となった。在庫は，1～3月期は5.4%の上昇，4～6月期は△1.2%の低下，7～9月期は△2.8%の

# ■ 調査から

低下, 10~12月期は0.5%の上昇となった。(表-3, 図-2)

また, 業種別生産指数を前年比で見ると, 輸送機械工業, 一般機械工業が2ケタ台の上昇を示し, 前年△15.9%と大幅に低下し鉱工業全体の低下に大きな影響を与えた電気機械工業が4.2%上昇した。一方, 鉱業(△8.2%), 繊維工業(△5.7%), その他製品工業(△3.1%)等が低下した。

本県と全国との生産指数の動きを比較してみると, 全国では, 前年比△0.3%と11年ぶりに低下したのに対し, 本県では, 60年に同△3.2%と10年ぶりの低下をしたが, 61年は同4.8%の上昇となり, 59年指数を上回った。(表-2, 図-1)

図-2 鉱工業指数の四半期推移

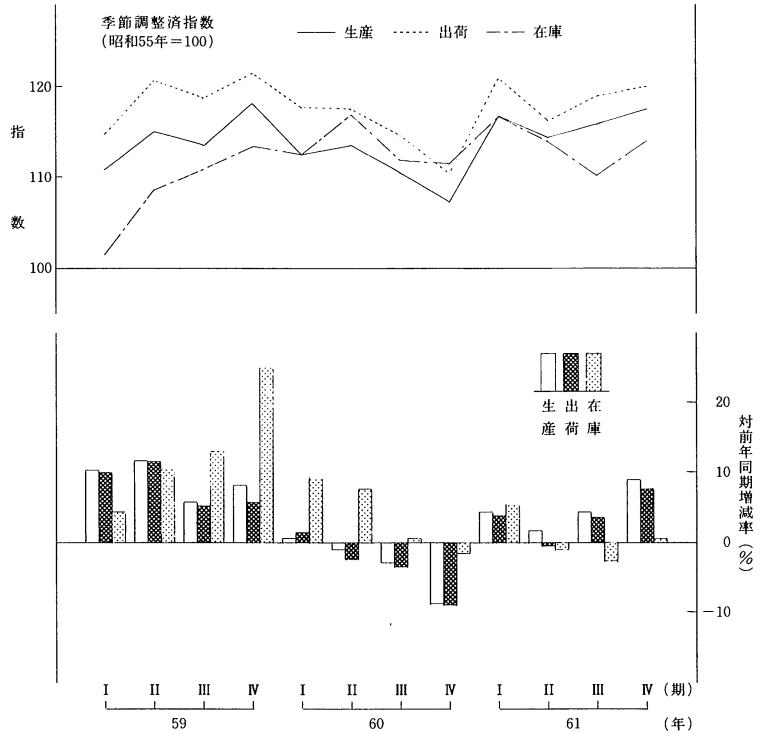


表-3 鉱工業指数の四半期推移

(55年=100, 季調済)

		59 年				60 年				61 年			
		1~3月期	4~6月期	7~9月期	10~12月期	1~3月期	4~6月期	7~9月期	10~12月期	1~3月期	4~6月期	7~9月期	10~12月期
生産	季節調整済指数	110.9	115.1	113.6	118.1	112.1	113.7	110.4	107.3	116.7	114.4	115.8	117.6
	対前期増減率(%)	1.4	3.8	△1.3	4.0	△5.1	1.4	△2.9	△2.8	8.8	△2.0	1.2	1.6
	対前年同期増減率(%)	10.4	11.5	5.8	8.0	0.5	△1.1	△3.0	△8.7	4.3	1.7	4.2	8.9
出荷	季節調整済指数	114.8	120.7	118.8	121.4	117.7	117.4	114.5	110.4	120.9	116.3	118.9	120.1
	対前期増減率(%)	△0.2	5.1	△1.6	2.2	△3.1	△0.3	△2.5	△3.6	9.5	△3.8	2.2	1.0
	対前年同期増減率(%)	9.9	11.5	5.2	5.8	1.3	△2.4	△3.5	△8.8	3.9	△0.5	3.4	7.5
在庫	季節調整済指数	101.4	108.6	110.9	113.3	112.4	116.9	111.8	111.4	116.7	113.9	110.3	113.9
	対前期増減率(%)	11.8	7.1	2.1	2.2	△0.8	4.0	△4.4	△0.4	4.8	△2.4	△3.2	3.3
	対前年同期増減率(%)	4.2	10.3	12.9	24.8	9.2	7.6	0.6	△1.6	5.4	△1.2	△2.8	0.5

(注) 対前年同期増減率は原指数による。

## 主要業種の概要

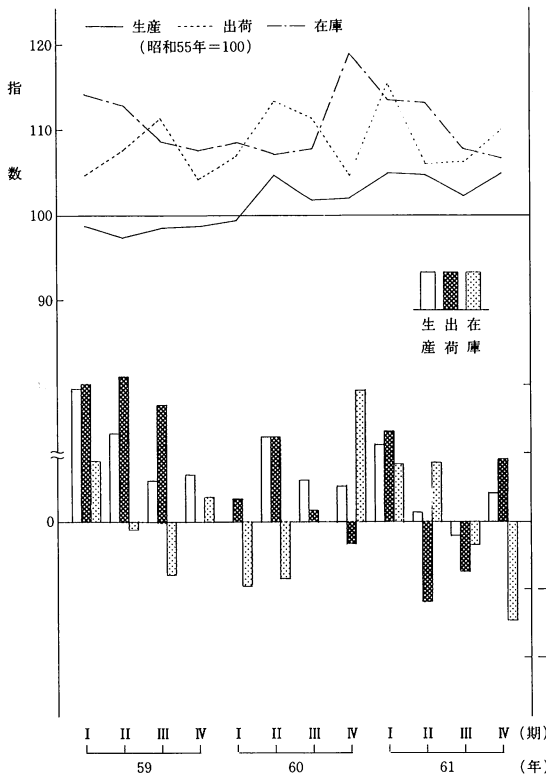
### 1. 鉄鋼業

61年の鉄鋼業の生産は104.0で前年比2.1%の上昇となった。出荷は109.5で同0.6%の上昇、在庫は106.0で同8.8%の低下となった。

生産の年間の動きを前期比でみると、1～3月期は2.7%の上昇、4～6月期は△0.1%の低下、7～9月期は△2.6%の低下、10～12月期は2.8%の上昇となった。前年同期比では、7～9月期を除き前年に比べ上昇した。品目別にみると、鑄鋼品、普通鋼冷延鋼板、鍛工品等が上昇し、鍛鋼品、小型棒鋼等が低下した。

図-3 主要業種の四半期推移

図-3-(1) 鉄鋼業

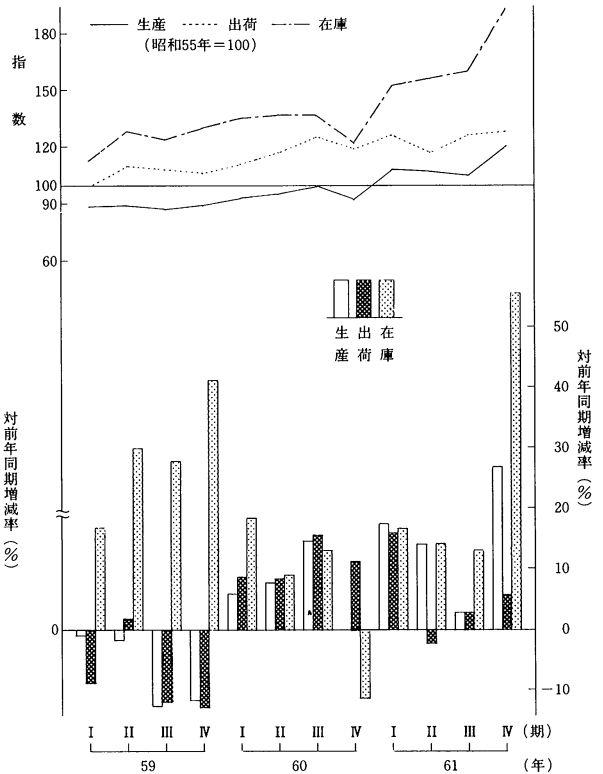


### 2. 一般機械工業

61年の一般機械工業の生産は110.7で前年比15.2%の上昇、出荷は125.1で同5.4%の上昇、在庫は199.0で同56.0%の上昇となった。

生産の年間の動きを前期比でみると、1～3月期は17.3%の上昇、4～6月期は△0.1%の低下、7～9月期は△2.4%の低下、10～12月期は14.1%の上昇となった。前年同期比では、各期とも前年に比べ上昇したが、特に10～12月期については20%台の上昇となった。品目別にみると、乗用車用エアコン、ショベル系掘削機械、ポンプ等が上昇し、タイプライター、クレーン等が低下した。

図-3-(2) 一般機械工業



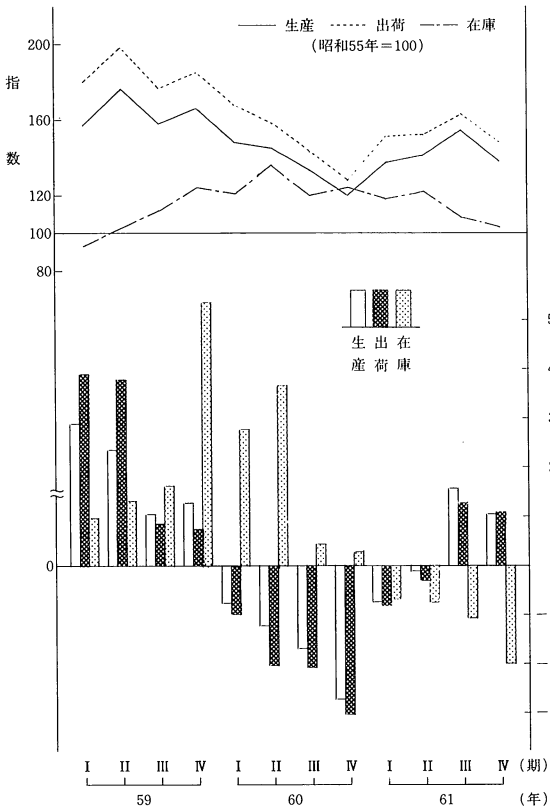
# ■ 調査から

## 3. 電気機械工業

61年の電気機械工業の生産は、142.8で前年比4.2%の上昇、出荷は153.3で同2.7%の上昇、在庫は96.6で同△19.8%の低下となった。

生産の年間の動きを前期比で見ると、1～3月期は13.7%の上昇、4～6月期は3.9%の上昇、7～9月期は8.1%の上昇、10～12月期は△10.6%の低下となった。前年同期比では、上期は低下し、下期は上昇した。品目別にみると、非標準変圧器、交流発電機、車両用制御装置等が上昇し、特殊用途変圧器、特殊用白熱灯器具、継電器等が低下した。

図-3-(3) 電気機械工業

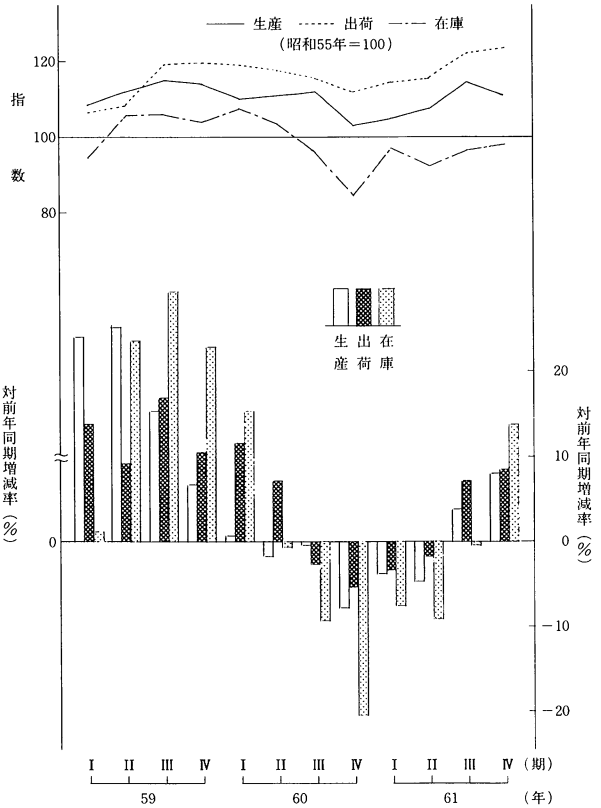


## 4. 化学工業

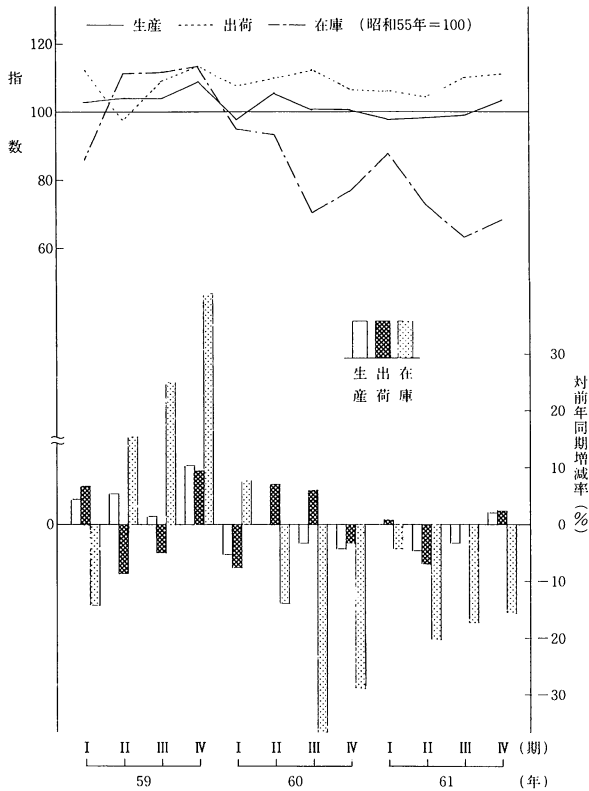
61年の化学工業の生産は、111.4で前年比1.4%の上昇、出荷は120.2で同2.9%の上昇、在庫は92.2で同14.0%の上昇となった。

生産の年間の動きを前期比で見ると、1～3月期は2.1%の上昇、4～6月期は2.3%の上昇、7～9月期は6.6%の上昇、10～12月期は△1.6%の低下となった。前年同期比では、上期は低下し、下期は上昇した。品目別にみると、酸化プロピレン、精製グリセリン、油脂・界面活性剤等が上昇し、アンモニア、尿素、エチレングリコール等が低下した。

図-3-(4) 化学工業



図一三—(5) 食料品・たばこ工業



### 5. 食料品・たばこ工業

61年の食料品・たばこ工業の生産は、99.4で前年比△1.4%の低下、出荷は106.8で同△0.9%の低下、在庫は56.9で同△14.7%の低下となった。

生産の年間の動きを前期比で見ると、1～3月期は△3.0%の低下、4～6月期は0.7%の上昇、7～9月期は0.5%の上昇、10～12月期は3.7%の上昇であった。前年同期比では10～12月期を除き前年に比べ低下した。品目別にみると、即席めん、ビール等が上昇し、たばこ、ケチャップ、ソース等が低下した。

(統計課・企画分析グループ)

## 統 計 の 日

毎年、10月18日は「統計の日」です。

この日が「統計の日」とされたのは、昭和48年7月3日の閣議了解に基づき設けられたものであり、10月18日という日は、明治3年に我が国最初の近代的な生産統計、「府県物産表」という統計調査の実施が公布された日です。

「統計の日」制定の理由は、国民一人一人に統計に対する必要性を理解していただき、政府、地方公共団体が実施する統計調査に、より一層のご協力をいただくためです。これら統計

調査により一層のご協力をお願いいたします。

この「統計の日」を中心に実施される主な行事は次のとおりです。

- 第38回全国統計大会 昭和62年10月29日  
新潟県新潟市
- 第29回茨城県統計大会 昭和62年11月12日  
水戸市「県民文化センター」
- 第34回統計グラフ全国コンクール
- 第38回茨城県統計グラフコンクール